

陸上自衛隊最大の演習場:矢白別演習場に、一寸変った人工物、障壁らしき物がある。演習場内新富地区や三股地区にそれは多く見られる。幕庶の物知りに聞けば、「駒止め」だと言う。放牧してある馬が逃げ出さないように作った障壁であり、ヒグマから馬を守る為の防護壁の役割も果していたようだ。何故、馬なのかを含め、演習場やその周辺の歴史を若干調べてみた。軍馬補充部根室支部、計根別飛行場等旧軍に関する事蹟あり、それらに関連しての別海駐屯地や矢白別演習場の沿革も明らかになった。

I 軍馬補充部根室支部



「駒止め」が多く見られるのは、新富、三股の両地区である。これぞ、現矢白別演習場の一部が旧軍の軍馬補充部根室支部の軍馬育成牧場であった証左である。(軍馬補充部に関しては、「朔東から第 54 号:馬産地、朔東」を参照して頂きたい。

別海町西春別地区の開拓は、昭和 7(1932)年に始まった。この西春別地区に、陸軍が軍馬補充部を開設することを決定し、開拓入植者に説明をしたのは、昭和 11(1936)年 10 月の秋季運動会の最中であったという。移転・再入植する農家は、31 戸であった。

昭和 12 年(1937)年 5 月に起工、翌年の 10 月に開厩式が行われた。面積 19,000ha に及ぶ広大な地域であった。現矢白別演習場の別寒辺地区、新富地区、三股地区は、その一部(なのか、その殆んどなのかを判断すべき資料がないので不明であり、御容赦を!)である。

西春別市街地には、軍馬補充部の庁舎や官舎が建設され、200 人規模の軍人・軍属が配置された。市街地には電気が導入され、近代化が一気に進んだとも言われている。

本育成牧場では、道内各地から集められた 2 歳馬 3 0 0 頭程度を放牧し、3 歳になってから送り出した。昭和 18 年に閉鎖されるまでの間に計算上は 1500 頭以上を軍馬として送り出したことになるが、軍馬補充部の碑の説明では毎年その程度となっており、疑問あり。

昭和 18 年に独立第 3 歩兵部隊がこの原野を利用して演習することとなり、軍馬補充部を十勝の国仙美里(現本別町)に移し、軍馬補充部十勝支部として発足させ、昭和 19(1944)年秋を以って軍馬補充部根室支部の短い役割は終わった。尚、同歩兵部隊の演習は結局実施されなかった。

支部の閉鎖に伴い、軍の建物は、民家・学校・教員住宅等に転用されたが、当時の官舎が本久町にほぼ当時の外観のまま残されている。

「軍馬補充部之碑」が同同志会の手によって、別海町開基百年記念事業の一環(?)として、昭和 53 年 10 月拓進 4 叉路に建立されている。

II 計根別飛行場

大東亜戦争開戦の昭和 16(1941)年、陸軍は、西春別地区に飛行場を建設することを決定、翌年の 1 月から測量開始・第一次工事、更に昭和 18(1943)年には第二次工事を実施して、第一から第四までの飛行場(これらを総称して計根別飛行場と言う。)を完成させた。開隊式が行われたのは、昭和 19(1944)年 2 月であり、帯広第一飛行師団の第 20 飛行団隷下の 99 式襲撃機を有する第 32 戦隊が配置され、2500 人の兵員が居たとされる。この飛行場建設に伴い、20 戸(?)が移転した。第 2 飛行場は、第一飛行場の代替として、両飛行場間は誘導路で結ばれた。開進の第 3 飛行場、広野の第 4 飛行場は、擬装用で滑走路は板張り・網張りであったらしい。別海フライトパーク付近(かつての某有名女性歌手の別荘が近隣にある由)にあった第一飛行場の滑走路は、1500m×100m(コンクリート)、1400m×150m(転圧)であった。基地司令部や特設警備工兵隊等が置かれ、格納庫 8 棟、掩体大小併せて 33 個(有蓋掩体 2 個が残存)、司令部跡は基礎のみある。滑走路誘導路が一部現存していると言うが、真偽不明。

第四飛行場は、現在の別海駐屯地であり、航空自衛隊計根別飛行場である。ここに至るまでの経緯を略述しよう。終戦に伴い、第四飛行場は、当時の農林省に所管換えされ、開拓財産として一部が農民に開放、10 戸が入植した。昭和 26(1951)年第四飛行場地区に米軍が進駐し、駐留軍施設隊が滑走路・誘導路の補修を始め、昭和 27 年(1952)年には、米空軍が進駐し、昭和 32(1957)1 月撤退までの 4 年余り駐屯した。米軍撤退と同時に航空自衛隊計根別基地が開設したが、航空自衛隊も滑走路部分のみを残して基地閉鎖をしたので、昭和 38(1963)年別海駐屯部隊の位置が決定され、40 (1965) 年 3 月釧路駐屯地の分屯地として別海分屯地が発足、第 5 偵察隊と第 27 普通科連隊第 3 中隊が配置された。昭和 41(1966)年には駐屯地に昇格し、諸隊が配置され、逐次に充実されてきた。矢白別演習場の管理をも担任し、今では、北方機動特別演習、米海兵隊移転射撃に為に重要な役割を担う駐屯地となっている。

III 矢白別演習場

本演習場は、別海町等 3 町にまたがる日本最大の演習場であり、昭和 37 年度以降昭和 40 年度までの間に民有地の購入並びに所管換え等の手続きを経て取得されたものである。別寒辺地区、新富地区、三股地区のかつて軍馬補充部根室市部の育成牧場として使用された 3 地区を含み、矢白別第 3 地区及びプライベート地区の 5 地区から構成されている。これらの地区は何れも旧内務省所管の国有地であったが、軍馬補充部用として陸軍省に所管換えになった地区を除き、終戦時まで内務省が北海道庁に管理させていた。戦後は、大蔵、農林の両省に引き継がれたが、一部地区は自作農創設特別措置法に基づき払い下げられたが、大部分は演習場として取得するまで未利用の状態であった。演習場としての使用は、昭和 30 年 9 月第 6 普通科連隊が、現演習場の一部を根室支庁より無償貸付を受けて使用したのが始まりで、その後第 5 師団隷下部隊が、毎年契約を更新して使用していた。昭和 36 年正式取得が決定した。5 師団管内に所在してする演習場で、且つ我々にとっても非常に重要な演習場であるので、大事に使用して、武を練り心を磨かねばと決意している次第である。

(参考：西春別駅前 50 年史、西春別農業協同組合 50 年史、三十三部落開拓 50 周年記念実行委員会「風雪に耐えて」、別海駐屯地業務隊資料、各種 HP)